分岐点

エリー

本文

https://youtu.be/dsa0ja1oDIA

　　扉を叩く音。

真理絵「幸太郎、いるんでしょ！　起きなさい」

幸太郎M「激しいノック音で眠りから呼び戻されたオレは、玄関ドアに向かった」

真理絵「幸太郎、また寝ていたのね」
幸太郎「真理絵ちゃん、また同じ夢を見た。男が現れた」
真理絵「歩きながら聞くから、とにかく支度しなさい。遅刻するわよ」

幸太郎M「真理絵にせかされ、オレはノロノロと着替えて家を出た」

真理絵「それにしても一週間も同じ夢を見るなんて、不思議なこともあるものね」
幸太郎「男の顔は見えない。赤い光の中に黒いシルエットが浮かび上がっている」
真理絵「あまり気にしない方がいいよ。ほら学校に着いた」

　　キーボードを叩く音。

幸太郎M「オレと真理絵はゲーム専門学校で知り合った。オレの将来の夢はゲームプランナー……が建前。狭き門を狙っている。本音はシステムエンジニア。ここに来て分かった。エンタテイメントはオレに向いてない」

真理絵「卒業制作、何をやるか決めた？」
幸太郎「横スクロールシューティング」
真理絵「やっぱりシューティングか。習ったこと生かしやすいものね」

幸太郎M「生まれてから今日まで、オレはさまざまな場所で勉強してきた。学んだことが身に着いているのかオレには分からない。ただ長い助走期間を走り続けてきた。オレは答えが知りたい。自分の未来が見たい」

真理絵「幸太郎？　どうかしたの」
幸太郎「別に、なんでもない」
真理絵「また夢の男のことでも考えていたんじゃない？　早く忘れなさいって。何日続いても夢

はただの夢だから」
男の声「違う。夢は過去や未来につながっている」
幸太郎「今、何か言った？」
真理絵「言ったわよ。聞いてなかったの？　夢なんて早く忘れなさいって」
幸太郎「違う。男の声だった。真理絵ちゃんには聞こえなかったのか」
真理絵「まだ寝ぼけているの？　ここは学校だし、あなたは寝てないし、夢の中の男の声なんて聞こえません。大丈夫？」

幸太郎M「まったく信じない真理絵の態度に苛立ち、オレは席を立った」

真理絵「ちょっと自習だからって勝手に抜けちゃ駄目でしょう。待ちなさい、幸太郎」

　　扉を開く音。

幸太郎M「家にたどり着いたオレは、布団にもぐり込みぎゅっと目を閉じた。心の中で男の出現を願った。すると赤い光の中に男が姿を表し、深々と頭を下げた」

男「おかえり幸太郎。夢の世界へようこそ。とうとうボクの呼びかけに答えたね」
幸太郎「お前は誰だ」
男「ボクは夢の世界の案内人。君が知りたいことなら何でも答える便利な男さ」
幸太郎「なぜ現れた？」
男「ボクを呼びだしたのは幸太郎だ。自分の未来が見たいと願っただろう？」
幸太郎「俺が願ったのは未来で夢じゃない」
男「まったくこれだから素人は困る。夢は未来の入口だ。幾重にも重なった可能性を映す鏡だ。現実になった瞬間、儚く消える泡のようなもの」
幸太郎「それなら卒業後のオレについて教えてくれ」
男「今のままの幸太郎なら、未来も今と同じだ。一年後も、十年後も、布団をかぶって寝ている」
幸太郎「なんだよそれ。本当は分からないからそんな風にごまかしているんだろう」
男「半分当たりで、半分外れ。幸太郎には百分の一、いや一万分の一、いやいや一億分の一の可能性が眠っている」
幸太郎「つまりほとんど実現不可能ってことだろう？」
男「運命はいたずら好きでチャンスは一瞬で過ぎてしまう。残念だ。本当に残念だ」
幸太郎「そんな話ならもういい。オレは寝る」
男「ボクには未来が見えてしまう。何をやっても面白くない。だって思うがままなんだもの。ああすればこうなる。すべてお見通しでつまらない。何も知らないで寝ていられてうらやましい」

幸太郎M「男が消えると闇が訪れた。オレは一週間ぶりに深い眠りに落ちた」

　　扉を叩く音。

真理絵「幸太郎、いるんでしょ！」

幸太郎M「ノックの音はいつまでも続いた。オレはノソノソと玄関に向かった」

真理絵「幸太郎、どうして帰っちゃったの？　どこか悪いの？」
幸太郎「この一週間ろくに寝てないんだ。お願いだから寝かせてくれ。さっきやっと眠りに落ちたんだ」
真理絵「でも何も食べてないでしょう？　はい、牛丼。お金はいいわ。今度おごってもらうから。明日の朝、また起こしに来るから、今日は食べたら寝なさい。おやすみなさい」

幸太郎M「机に牛丼を置いたオレは、布団に這い戻った。目を閉じるとまた赤い光の中に男が現れた」

男「はーい、ボクのこと呼んだ？」
幸太郎「呼んでない。頼むからオレを眠らせてくれ」
男「何度も言うけど、呼び出しているのは幸太郎で、ボクじゃない」
幸太郎「どうすれば消えるんだ？」
男「幸太郎が、ボクに知りたいことを聞いたら消えるかもね？」
男「一億分の一の可能性ってなんだよ」
男「君が最初の一歩を踏み出す。そこから今とは違う未来が見える。どんな未来か知りたくないか？」
幸太郎「オレが活躍するの？」
男「活躍はしない。誰にも知られず地味に生きて、地味に死ぬ」
幸太郎「そんなら未来なら知りたくない」
男「でもボクが見たんだ。一億分の一の未来は幸太郎から始まるんだ。幸太郎なしには成り立たないんだ。大切な一歩なんだ。長い話になる。食事を済ました方がいい。せっかく起きたんだ。牛丼、食べれば？」

幸太郎M「男の話につきあう覚悟を決めたオレは、真理絵が持ってきた牛丼を食べた」

男「分岐点まであまり時間がない。食べながら聞いてくれ」
幸太郎「目を閉じてないのに、どうしてお前の声が聞こえるんだ？」
男「学校でも聞こえただろう。幸太郎がこちらに注意を向けていれば、いつでもどこでも聞こ

える」
幸太郎「へえ～、しゃべらなくても思っただけで伝わるんだ。便利といえば便利だな」
男「そうだ。状況を楽しめよ。いいか幸太郎、このまま行くと世界はひどい格差社会に苦しむ。日本だけじゃない世界中誰ひとり安心して暮らせなくなる」
幸太郎「今も十分悪いけど、もっと悪くなるってこと？」
男「そうだ。このままいけばもっと世界は悪くなる。しかし2173年、日本は奇跡を起こす。滅亡の危機を回避する。鍵は幸太郎が握っている。幸太郎が選びそうにないことを選んだ。その一歩がすべての始まりだ」
幸太郎「お前がオレに何かするのか？」
男「それはありえない。ボクにできるのは未来の話をすることだけ。無理矢理何かをさせることはできない」

幸太郎M「牛丼を食べ終えたオレは、誰もいない部屋の中を見回した。どこを向いていいのか分からず、結局布団に戻って目を閉じた。すると赤い光の中から男が現れた。男は黒髪を揺らしながら近づいてきた」

男「人は再び自然にかえる。
18世紀後半に始まった産業革命は、企業のルールが家庭を支配する暗黒時代を招く。自殺者、失業者が増え、出生率は減り続ける。誰もが行き詰まりを予感した。
もはや結婚を核とする家族制度は時代に合わなくなっていた。そこで政府は、個人を基準とする新しい制度を導入する。
山村、農村、漁村を保護区と定め、国土保全と子育てを担う人材を住まわせた。
地方都市は国内都市と名前を変えて、保護区の活動をサポートした。
東京２３区、横浜、名古屋、大阪、博多の５都市は国際都市と名前を変えて、国の代表として国際競争に参加した。
教育も大きく方針転換する。知識から技能重視に変わる。
子どもは12歳まで保護区で育てられる。13～15歳になると寮に入り、職業訓練を受ける。無事に卒寮すると保護区で生活する資格が与えられる。
卒寮式では、一人一人が自分の未来を宣言する。そして大人の仲間入りを果たす」
幸太郎「つまり俺みたいにいつまでも学生でいることはないわけだ」
男「その通り。最大の狙いは、子どもの自立にある。16歳で自分のことは自分で学べる世界を作り上げた」

幸太郎M「すっかり眠気の覚めたオレは、男の話に夢中になった。オレが最初の一歩を踏み出し世界を変える。このオレが？」

男「信じられないだろう。ボクもなかなか最初の分岐点が幸太郎だと気づかなかった。だから何

度やっても億分の一の可能性を引きだせなかった。でもとうとう最後のピースを見つけた」

幸太郎M「夢なら夢でいい。オレはもっと男の話を聞いてみたくなった」

男「未来では、子どもは12歳までに自分のことは自分でできるようにしつけられる。13歳になると入寮して団体行動を学習する。16歳になるとすべての義務を終えて自由の身になる。大人として扱われる。生き方を自分で選択できる。というより選択しなければならない」
幸太郎「自分のことが自分でできるようにならなかったら？」
男「管理区で雑用をして暮らすことになる。自由選択の権利を失う」
幸太郎「未来が今と違うことは分かった。だけどオレとどう関係してくる？」
男「正確には自然に出来上がったもので、意図的に作ったものではない。しかし、幸太郎が欠けたパターンでは必ず破たんする。幸太郎が絶妙なバランスを保っている」
幸太郎「具体的に何をするんだ？」
男「真理絵と一緒に卒業制作でゲームを作る。そのゲームが未来社会の土台となる」
幸太郎「ゲームが現実になるのか？」
男「全体の流れは既に真理絵が考え済みだ。しかし真理絵はどうプログラムすればいいのか分からず迷っている」
幸太郎「いったいどんな内容なんだ？」
男「育成ゲームのようなものだ」
幸太郎「エンディングを競うわけか」
男「０~12歳は掲示板に書かれた依頼をこなしたり、町や森などを探検したり、自由に過ごす。やったことに応じてスキルが上がったり、ポイントをもらったりする。何をしたかによって、寮での仕事が決まる」
幸太郎「将来も決まるってこと？」
男「その通り。保護区は弱者を保護するために存在するわけではない。国土保全と子どもの育成が目的だ。何もしないまますごせば、不適格の烙印を押されてしまう」
幸太郎「でもゲームはゲームで現実とは違うだろう？」
男「幸太郎たちがするのはゲームを作って無料公開するところまでだ。実現するのは別の人間の手によって行われる」
幸太郎「みんなが夢中になるほど面白いのか？　もっと詳しく教えてくれよ」
男「ボクに分かるのは、ゲームを作ったという事実だけで、どう作ったのかまでは分からない。二人で答えを見つけるしかない」
幸太郎「真理絵が一人で作ったらどうなるんだ？」
男「企画止まりで完成に至らない」
幸太郎「オレ以外を誘ったら？」
男「完成はするが、無料公開に至らない」
幸太郎「オレ以外が参加したら」

男「グラフィックがきれいになる」

幸太郎M「たかがゲームで世界が変わるなんて、オレにはとても信じられない」

男「仮に二人の少女がいたとする。一人は保護区生まれの保護区育ちで、両親に囲まれて暮らしてきた。もう一人は自由区生まれの保護区育ちで、両親から離れて暮らしてきた。二人は姉妹として育てられてきた。しかし、保護区に両親が居る少女は保護区に戻り、自由区に両親が居る少女は自由区に出ていった。卒寮を境に別々の未来を歩き出す」
幸太郎「連絡は取れるけど、行き来することは難しいってわけだ」
男「自由区に出た少女は、結婚して子どもを授かる。自由区で育てるより、保護区に預けて自然に触れた方が子どものためになると考えた少女は、保護区に戻った少女に子どもを預ける。こうしてまた義兄弟ができていく」
幸太郎「離れ離れになってもつかんがっているんだな」
男「それだけじゃない。保護区があることで失業や自殺、離婚による貧困の連鎖から救われる。誰もが生きていく場所を得られる。やり直しのチャンスが与えられる」
幸太郎「オレの子孫も？」
男「幸太郎と真理絵の子孫も災害から救われる」
幸太郎「ちょっと待って、オレと真理絵の子孫だって！」
男「９割の確率で二人は結婚する」
幸太郎「本当なのか？」
男「本当だ。なんならいつどんな風に死ぬのかも教えようか？」
幸太郎「やめてくれ。これ以上は知りたくない」
男「知っておいた方がいいと思うけど、幸太郎が聞きたくないなら仕方ない」
幸太郎「お前の話が本当かどうかは、明日真理絵に会えば分かる。今日はもう寝る」
男「その方がいい。おやすみ、幸太郎」

幸太郎M「男が去ると闇に包まれ、オレは深い眠りに落ちた」

　　扉を叩く音。

真理絵「幸太郎、起きなさい！」

幸太郎M「着替えを済ませてノックを待ち構えていたオレは、玄関に向かった」

真理絵「あら、着替えているなんて珍しい。さあ、行きましょう」

幸太郎M「オレは真理絵に夢の話をするべきか迷っていた。ただの夢かもしれない。本当にオレ

が鍵を握っているのかもしれない。どちらなのか、オレには分からなかった」

真理絵「行かないの？」
幸太郎「あのさ、卒業制作なんだけど、真理絵ちゃんはもう何をやるのか決まった？」
真理絵「やりたいことはあるけど、どうプログラムすればいいのか分からない。やっぱりわたしもシューティングにしようかな」
幸太郎「よかったらオレと組まない？　手伝うよ」
真理絵「幸太郎とわたしが一緒に作るの？　いいけど、急にどうしたの？」
幸太郎「いつも起こしてもらっているし、できることがあったらと思っただけだよ」
真理絵「本当はね、わたしから頼もうと思っていたの。だから幸太郎から言ってくれてうれしい」

幸太郎M「一億分の一の確率でもいい。もしかするとオレが世界を動かしたのかもしれない。そう考えたら愉快じゃないか。夢なのか本当なのか分からない。しかし、オレは最初の一歩を踏み出した」

真理絵「学校に着いたら見て欲しいものがあるの。行きましょう」
幸太郎「そうだね。行こう」

　　扉を閉める音。